百々裏話（55）

おもて　あきら

〔多武峰の能―その五〕

昨年十一月から四回にわたって、多武峰（タンノミネ・トウノミネ）の猿楽の特異性などについて考察してきた。引き続いて、多武峰と大和猿楽の結びつきの種々相について考えてみたい。

◎多武の峰と大和猿楽

大和猿楽四座が多武峰の八講猿楽に参勤する義務を負うていたことは、「その一」に述べた如く、『申楽談儀』の「定、魚崎御座之事」（観世座規）や金春禅竹編の『円満井座壁書（法式）』によって知られ、寛正四年（一四六三）以後の記録からも確認できることである。しかし、それがいつ頃からどういう事情で確立されてきた慣行であるかは、史料が乏しく、明らかではない。この点に関する研究も意外に少なく、管見では香西精氏の「山田猿楽（世子語抄32）」（『宝生』昭和39年12月号）の存在を知るのみである。その香西説をたどりながら論を進めてゆくことにしたい。

香西氏の論旨を、私の志向する論点に少々引き寄せて要約すれば、次の如くである。

(イ)興福寺配下の大和猿楽四座が、興福寺と仲の悪かった多武峰寺への参勤を義務づけられていたのは不可解なことである。(ロ)興福寺参勤の慣行が固まる以前に、多武峰参勤が大和猿楽の義務として確立していて、興福寺としてもその先例旧規を認めざるを得なかったのではないか。(ハ)外山（宝生）座が元来は多武峰寺付きの猿楽で、(ニ)その外山座と、多武峰の末寺の山田寺付属だったらしい山田猿楽の座（山田座、後に出合座）が最初に多武峰に参勤していたのではないか。(ホ)出合座が衰微した後に結崎座（観世）がそれにかわったものであろう。以上五点に整理できよう。

まず(イ)の説には、私も同感である。庇護する社寺と奉仕する猿楽座との支配・隷属の関係はさほど明瞭ではないが、少なくとも、他所や他寺で演能する自由は猿楽座に与えられていた。従って、ある猿楽座が幾つもの寺に参勤することは、異とするに足るまい。現に『風姿花伝』によれば、法勝寺御修正参勤猿楽たる新座・本座・法成寺座の三座は、賀茂や住吉の神事にも参勤しているのである。だが、大和猿楽の興福寺・多武峰両寺参勤は、それらと同一視できないように思われる。

その第一の理由は、香西氏も指摘される如く、中世の両寺の険悪な間柄である。中世の興福寺は、春日神社と一体で、春日の神威を借りて寺勢を拡大し、事実上大和一国を支配する守護的存在であった。南都・北嶺と並称され、比叡山延暦寺とともに日本仏教界を両分した平安後期ほどの教学上の権威は、新興仏教の進出によって次第に低下しつつあったが、自負と北嶺への対抗意識は少しも衰えなかった。一方、多武峰は、興福寺の勢内範囲たる大和盆地南端に聳え、古くは興福寺に属していたが、十世記中頃から天台にかわり、延暦寺の末寺となっていた。末寺とは言え、寺領も多く、僧兵も強力で、大和では屈指の勢力を持っていたのである。従って、南都・北嶺の対立が激化するにつれて、多武峰は興福寺にとって目の上のタンコブ的な存在となり、平安後期から鎌倉時代にかけて、延暦寺と争いが生ずるたびに興福寺衆徒は多武峰を襲撃し、一山を焼亡させたこともしばしばであった。興福寺は藤原氏の氏寺、多武峰は鎌足の廟所という密接な関係にあり、ともに藤原氏の氏の長者の指令を奉ずる寺でありながら、両寺の仲はすこぶる険悪であった。南北朝の争乱に際し、興福寺は北朝方に、多武峰は南朝方にくみしたため、両寺の敵対関係は室町時代にまで継承されたのである。そのように対立していた興福寺と多武峰の双方に、大和猿楽四座は参勤の義務を負うていたのである。疑問を抱くのが当然であろう。

また、興福寺と四座の関係が、興福寺の強大さのせいか、他寺社と他猿楽の関係に比較して、支配・従属の度合がより顕著であったと諸史料から推測されることも、四座の両寺参勤を法勝寺御修正猿楽などと同一視することを許さないように思われる。

(イ)の疑問から当然出てくるのが(ロ)の推測である。多武峰への大和猿楽参勤の慣習の確立時期を、四座の興福寺への参勤より以前であろうと考えるわけである。この点についても私は香西説に賛成したい。四座の興福寺所属がはっきりした後に多武峰への参勤が義務として新たに生ずることは、極めて可能性が薄いが、多武峰へ参勤していた猿楽が興福寺へも参勤するようになり、やがて興福寺所属にかわるということは、当時の両寺の勢力関係から、十分あり得ることである。猿楽座の活動の一部としての単なる演能ならともかく、結崎(観世)座について言えば、畿内にいながら参加しなければ座を追放されるほど重い義務であり、春日興福寺への参勤よりも多武峰への勤仕が重視されていた。四座の役人を大夫や、権守に任ずる権限を多武峰の衆徒が、興福寺衆徒と同じく所持していた(それについては別の機会に詳述したい)。これらのことは、多武峰への大和猿楽の参勤が、四座揃ってではなかったにしても、四座の興福寺所属以前から慣行として固まっていたのでなければ、ほとんどあり得ないことのように思われる。すでに見たような、多武峰の猿楽に残存していた古色——野外劇風演出、新作能上演、権守が主役の式三番、それらに通ずる立合(競演)的色彩の濃さ、六十六番猿楽の奇習など——が、多武峰と猿楽の結びつきが猿楽能大成以前からであることを暗示しているのも右の推測を助けよう。

多武峰への猿楽参勤が興福寺への四座参勤より先であったろうと考える背後には、私の場合四座の興福寺参勤がさほど古くからのことではないという認識も大きく作用している。大和猿楽四座は元来から揃って春日興福寺へ参勤していたわけではない。『円満井座壁書』は、円満井(金春)座が本座で、他三座と別であることを主張しているが、それが事実で、他三座は金春との縁戚を頼るなどして後に春日興福寺へ参勤するようになったらしい。坂戸(金剛)座がもともとは法隆寺所属の猿楽であったことも、興福寺の勢威が周辺の猿楽座を吸引したことを物語っている。円満井・坂戸に外山(宝生)・結崎(観世)を加えた四座が揃って薪能や若宮祭に参勤するようになったのは、どんなに早くとも観阿弥による結崎座創立(一三六〇年頃か)以後のはずであり、記録の上では応永十年(一四〇三)にならないと四座参勤が確認できない。『花伝』第四神儀が「春日御神事相随申楽」として四座を列挙しているのが最古の史料と言えよう。実際にはもっと以前からのはずで、『申楽談儀』に、薪猿楽神事について、観阿弥清次が「二月ならば、末代まで必ず出勤する」と興福寺に約束した話が見えるから、観阿弥の殁した至徳元年(一三八四)には結崎座を含む四座の参勤が慣行となっていたのではないかと思われる。それにしても、薪能が二月に固定し、清次が右の約束をしたのは、清次の殁する直前だったと、春日権神主師盛の『至徳二年記』から推測されるし、四座と興福寺の結びつきは、そう古くからではなく、観阿弥の頃にはそう強固でもなかったようである。

従って、多武峰への大和猿楽参勤を興福への四座参勤より以前からであろうと考えるのは、多武峰と大和猿楽の結びつきをさほど早い時期に想定することにはならず、可能性の高い推測と言ってもよいのではなかろうか。以上の見地から、私は香西説(ロ)にも賛成したいのである。

(イ)(ロ)ともに香西氏に同調したが、(ハ)以下については必ずしもそうではない。それについては次回に詳説したい。(43・4・4)